

教養科目としての英語史の可能性について

On the Prospect of 'History of English' as a Course in Liberal Arts Education

遠藤 史 (経済学部)

Fubito Endo (Faculty of Economics)

This paper aims to review and report on the educational practice of 'History of English', a liberal arts subject in Wakayama University, which the author has been in charge of for the past 10 years or more. The author describes details of the subject and tries to record its achievements and reflections, thus contributing to the future development of the university's liberal arts education. The paper deals with the practice of teaching the history of English to students from all faculties and grades of the university as an independent subject in the framework of liberal arts education, not as part of a specialized education course. The author gives a brief summary of an attempt to convey the joy of learning the history of English to a wide range of members by devising its contents and educational methods. Judging from the students' comments, fortunately, 'History of English' as a liberal arts subject was able to obtain positive reactions from the students that exceeded the level initially expected. This gives rise to a positive prospect for the further development of the subject. Some suggestions for the future development of English education in general are added.

教養教育、英語史、社会的文脈、受講生との対話、コメントシート

1. はじめに

本稿の目的は、筆者がこの10年来担当してきた本学の教養科目「英語の歴史」について、その授業実践を振り返り、報告することである。以下の内容では、この授業の詳細を記述し、到達点と反省点を記録に留める。それによって、和歌山大学の教養教育カリキュラムの将来の発展に寄与したい。受講生のコメントから判断する限り、教養科目としての「英語の歴史」は幸いにも、当初予想した水準を超える積極的な反応を得ることができた。このことは、教養科目としての英語史に対して、肯定的な見通しを与えてくれる。さらに一步を進めるなら、英語教育全般に対しても幾許かの示唆を与えるだろう。

「英語の歴史」はその名が示すように、学問的分野としては英語史に属する。英語史は、いわゆる英文科では伝統的に教えられてきた科目の一つである。ただし本稿で扱うのは、このような専門教育課程の一環ではなく、教養教育の中で、それ自身独立した科目として、全学部・全学年を対象に英語史を教えた実践についてである。講義内容や教育手法に工夫を重ね、可能な限り広いメンバーに英語史の面白さを伝えようとした試みの概要を示したい。

2. 教養科目「英語の歴史」開講の経緯と現状

筆者の英語史との出会いは学生時代にさかのぼる。所属していた言語学専攻のカリキュラムにおいて、独語学や中国語学と並んで履修した英語学の中の一つに、古英語を扱う授業があった。筆者の当時の主要な関心はフィンランド語の格システムにあったが、Henry Sweet の古英語入門書¹を講読する中で、古英語の豊かな格システムとその機能を知るに至り、現代の英語と大きく異なる文法体系の様相に驚いた。次いで参加した中英語の演習ではチョーサーの『カンタベリー物語』の総序²を読んで、古英語からの統語的な変化を実感し、新しい季節のような新鮮な感じを覚えた。フランス語の香り漂う語彙、優雅な脚韻の連なりを追っていくことも楽しい経験だった。

こうして英語史の一端に触れる中で、強く感じた点は3つある。第1の点は、言語類型の変化を実証的に研究できる分野として一般言語学的に面白いということである。第2の点は、堅固な言語事実の記述に支えられており、理論的な変転を繰り返す共時的英語学に比べて、学問分野としての安定感を感じたことである。そして第3の点は、言語事実の観察対象となる過去の資料が固有の文化的色彩を帯びたテキストであるがゆえに、外部（文学・歴史・文化・社会など）への回路が通じている可能性が見えたことである。筆者はまず第1の点で英語史に興味を抱くようになったのだが、教養科目としての英語史を構想する際には、第2と第3の点が大きく寄与してくれたように思う。

英語史という分野に本格的に取り組むことになったきっかけは、本学赴任後、非常勤先の近畿大学青鞞女子短期大学（2002年まで和歌山市にあった）から依頼された専門科目であった。この講義（「英語学概論Ⅱ」、1997年度後期）では、英文学中心の同校のカリキュラムを尊重し、英国の歴史と文化から出発し、言語学的な要素はエッセンスに絞り込んで、総合的な内容とした。専門書で知識を仕入れるのと同様並行的に進んだ授業であったが、学生たちの受講態度はまじめで、テキスト講読にも熱心に取り組んでくれた。ただしその後、筆者はオランダと日本で二つの国際的な言語学プロジェクトに参加したため、残念ながらこの講義の継続はかなわなかった。

再び英語史の講義に取り組んだのは2009年夏、本学での教員免許更新講習（「英語の歴史をたどる」、2009年8月5日）においてである³。受講者が大人であることを考慮して、内容を大幅に見直し、前回よりも語学的な色彩を強めたが、受講生たちが熱心に取り組む姿を再び見る事ができた。テキスト講読では文学作品からの引用を取り込み、こちらも概して好評であった。すでに2007年度から始めていた教養科目としての言語学概論の講義（「言語学入門」）で好感触を得ていたこともあり、言語学系の次なる教養科目として、この内容を拡充し、歴史・文化・言語学を融合させた内容での英語史が可能ではないかという発想がここに生じた。

こうしてスタートしたのが、2009年度後期から始めた教養科目「英語史入門」（2単位）である。まず夜間主コース（経済学部）で開講し、2010年度から昼間の時間帯に移動した（2011～2012年度は筆者の学部長就任のため休講）。その後この講義は、「教養の森」設置とカリキュラム変革に伴い、2014年度に教養科目「英語の歴史」（2単位）と名前を変え、現在に至っている。昼間の時間帯に移ってからの受講生は毎年3桁を数えているが、多かった年には大教室の収容人数いっぱいの380名程度を受け入れたこともある。その後、受講生数は落ち着

きを取り戻し、今年度は195名となっている。

3. 教養科目「英語の歴史」の授業内容

3.1 シラバスの内容

2009年度以降の内容は、細部の変更はあるものの、大枠はほとんど変えていない。今年度のシラバス（2020年度後期）の概略を紹介することで、この科目が意図しているところを述べていきたい。

「授業の概要・ねらい」では、まず「A.D.700年頃から現在までの英語の歴史をたどりながら、英語の文法・発音・語彙・綴り方などがどのように変化してきたかを概観する」と、英語史として常識的な内容を提示している。ただしこれに続けて「それとともに英語を取りまく社会的状況の移り変わりを観察する」と述べ、言語社会学的な視点も重視することを明言している。テキスト講読については、「単なる説明を超えて、各時代の英語の実態と、それを取りまく社会や文化が感じられるように努めたい」として、他分野との関連という意図を明確化している。さらに最後に「世界にはどのような英語が話されているか」「英語と他の言語との相違点」「英語の変化を理論的に説明する方法」などの一般言語学的な視点を提示している。これらのトピックは筆者の言語学的関心を反映しているが、受講生に対しては、この科目の受講を通じて、英語という言語の全体像を把握してもらうことを求めたものである。

「到達目標」としては、英語史として最重要の部分である「英語史の時代区分を知り、各時代の英語の特徴について知識を深めること」、次いで社会との関係を視野に入れて「英語の変化の要因について理解すること」、最後に言語学的な視野から「英語がどのようなタイプの言語なのか理解すること」の3つに絞り込んだ。これらの内容をマスターしているかどうかを的確に判断するためには、受講生に長文のレポートを書いてもらう必要がある。そのためこの授業の「成績評価の方法・基準」は一貫してレポート重視である。レポートの点数の割合は、年度によって違いはあるが70～80%（今年度はオンライン授業のため100%）としている。

「授業計画」に移ろう（今年度の例）。講義全体は5部に分れている。第1部では比較言語学から見た英語の系統を扱う（1回目の授業）。第2部では古英語を扱う（2回目～4回目）。以下、第3部では中英語（5回目～7回目）を、第4部では初期近代英語（8回目～10回目）を、第5部では現代の英語（11回目～13回目）をそれぞれ扱う⁴。各時代の英語を講義する際には、最初に時代背景を簡潔に提示し、次いで主要な類型的特点をあげて俯瞰的に文法全体を把握し、最後に語彙（借用語を含む）の全体像を検討するという順番をとっている。なお、現代の英語（第5部）だけはこの順番に拠らず、社会言語学的な研究成果を紹介し、事例中心に構成している。テキスト講読については、本来は各時代の語彙の検討の後に予定していたが、受講生が古い英語に慣れるペースが意外に速いことに気づいたので、現在では易しいテキストから随時読むようにしている。

3.2 教養科目として重視していること

シラバスからみる授業のあらまは以上の通りであるが、この他に、教養科目として筆者が重視している点がいくつかある。

まず第1点として、英語史の俯瞰的理解を重視する。言い換えれば、個々の文法事項・語彙の暗記のような、語学授業的な方向を取らない。これは使える時間数からの制約でもあるが、広い視野の獲得を目指す教養教育としてふさわしい方向を選択した。古英語の強変化動詞の屈折における母音交替を例にとろう。これは現代英語の「不規則変化」動詞につながる現象であるが、古英語では概ね規則的な7種の交替を示す。古英語のテキストを読みこなすにはこの7つのパターンを把握する必要があるが、俯瞰的な理解としてはむしろ、この母音交替が印欧祖語まで溯りうる現象であることを知ることが重要だ。これを知れば、現代英語の「不規則変化」動詞の起源の理解に至るからである(Lass 1994)。対して現代英語の「規則変化」動詞の源はゲルマン語派の内部に留まる。これを知れば、たとえばフランス語を習うとき、英語のような規則的な過去形の作り方に会わない理由が理解できるだろう。

第2点として、英語の置かれた言語社会的な文脈を重視する。多言語・多文化理解というグローバルな視点は教養教育の目標の一つであろうが、ただ唱道するだけでは単なるスローガンに終わる。この点、英語の歴史は格好の題材を提供してくれる。英語が多くの言語と接触を持ってきたこと—たとえばヴァイキングやノルマン人との密接な接触—は借用語のリストを検討すれば感得できる。ケルト諸語との拮抗関係を辿るなら、多言語地域としてのブリテン諸島の姿が視野に入り、多言語・多文化理解の課題も見えてこよう。筆者は授業の中で、なるべくウェールズ語の状況について話すように心がけている。ウェールズ旅行の話題に触れたりしながら、現地での二言語併用の状況まで話を進める。さらに時間が許せば、英語の勢力伸長のために消滅したコーンウォール語の復活運動の話題にも言及するようにしている。このような話題を提供することで、「イギリスの言語は英語だけ」のような誤解は正すことができよう。

第3点として、当時書かれたテキストに触れることを重視する。その場合、時間的制約はあるが、可能な限り多様なジャンルを読むようにしている。たとえば初期近代英語の場合、シェイクスピアのソネットの一篇、欽定訳聖書の一節、ドライデン『劇詩論』のごく一部、地方の貴婦人の書いた手紙、植民地からの報告書というのが、例年用意しているラインナップである。このようにジャンル並列的に読むことによって、当時の社会の全体像を感じ取れる利点があるうえ、いわゆる文学的なテキストにも身構えずに接することができる。

最後に第4点として、受講生との対話を重視する。教養教育の追求すべきものとしてコミュニケーション能力の養成があげられるが、受講生の関心が単なる応答の巧さではなく、できれば知的な深化に向けられることが望ましいだろう。大教室での授業でこれを追求するのは容易ではないが、本授業ではコメントシート（リアクション・ペーパー）を活用することによって解決を試みた。この点の詳細は次の節で論じたい。

4. 受講生の反応から得られたもの

例年の授業では、授業のはじめにA5版のコメントシートを配布し、授業時間内に記入してもらった上で、退出時に提出してもらっている。授業内容についての質問やコメント、授業に関連した情報の提供などを求めているが、内容に特段の制約は設けていない。しかし、優秀なものに加点するという方針で成績評価の20~30%をこのコメントシートにあてているの

で、受講生は積極的にコメントを書いているようだ。優に20行を超える充実したコメントを受け取ることも稀ではない。

次の回の授業では、その日の内容に入る前に、前回の質問・コメント中から優秀なものを選んで（記入者の名前は伏せて）紹介し、質問に対する答えやコメントに対する感想を口頭で返していく。それらを全員で共有することで前回の復習にもなり、内容を深化させることにも役立つ。大人数の教室で質問・コメントを求めても実際に発言しにくいだろうと思って始めた試みであったが、近年では、内容の深化という効果が大きいと感じている。以下、印象に残った受講生の反応の中からいくつか紹介してみたい。

多数寄せられるのが、「中学生以来の疑問だった、不規則変化の理由が分かって嬉しい」というコメントである。特に、manの複数形men（ウムラウト）、goの過去形went（補充法）、writeの過去形wrote（強変化動詞）などに触れたコメントが多い。共時的な規則に基づいていないので、これらを「理由」と言えるかどうか疑問もあろう。しかし、少なくとも受講生がこうした不規則な現象に理由付けを求めてきたことは理解すべきだ。言語学研究として厳密な共時的記述を目指すのであれば、教育現場でこうした歴史的説明を排除する理由はないのではなかろうか。

綴りと発音の複雑な関係についても同様である。たとえばmeetの母音はなぜ([e:]でなく) [i:]なのか、makeのaはなぜ([a:]でなく) [ei]であり、最後のeは発音されないのか。「とにかくそう覚えろと言われたのですが、納得できませんでした」というコメントが多く見られる（フォニックスはこれを規則化しているが、説明は与えていない）。大母音推移までの母音の音変化を知れば、このような永年の謎に答えが与えられる。関連して数詞oneと不定冠詞anの関係を学び、oneの発音は例外的なもの（おそらく他方言からの干渉）であり、本来の発音はonlyやaloneの中に継承されていることを知るのも興味深い。

長期にわたる統語変化がS字カーブの形を成して「完成」という近年の研究結果も印象深いようである(Aitchison 1991)。グラフで示すことによる説得の効果もあるが（特に理系学生に顕著である）、同様の効果が日本語の「ら抜き表現」に作用していけば、現在は誤用とされる「着れる」「見れる」のような形が、長期的には標準的となる可能性に思い至る受講者もいる。これはまさに、誤用と言語変化の関係を掘り下げるきっかけとなる重要な気づきであろう。

アメリカ英語が約400年の歴史しかないということも、例年驚きを持って受け止められる。「もっと長い歴史があると思っていました」という声とともに、「では、北アメリカではそれまで何語が話されていたのですか」という質問を受けることが多い。学生の世界史の知識不足を云々する前に、アメリカ大陸の先住民についてどれほど教えてきたのかを、逆に教育現場に問うべきだろう。グローバル化を語る際に不可欠な、先住民固有の言語とその現状について、あまり教える機会がなかったのではあるまいか。ちなみに筆者の授業では、これを好機として、世界各地の消滅に瀕した言語についてコメントすることにしている。

時には受講生の側から鋭い質問が寄せられる。最近印象に残ったのは、中英語終盤の時期における女性の手紙を紹介した際に、「では、イギリスの女性の識字率は当時どれほどだったのか」と問われたことである。残念ながら筆者はこれにうまく答えられず、それ以来この問

いは長い宿題となっている。このように受講生からの反応は、筆者の学びも深める効果をもたらした。

5. 教養への希望？—結びに代えて—

英語教育に実用的指向が定着して久しい。筆者はこれに異を唱えるつもりはない。初歩の語学における喜びは何よりも「通じた」と感じることにあり、そこを出発点とすることを否定するのは意地悪な考えだと思う。

ただ、学び始めて何年も経ち、ある程度難しい英語と付き合えるようになった段階を考えてみると、どこまでも頑なに実用的指向だけで押し切るのが賢い選択かどうか、筆者としては躊躇を感じる。それは比喩的に言えば、一応ピアノが弾けるようになった人間に、「次はモシュコフスキのエチュードだ」「次はラフマニノフのプレリュードだ」と際限のない難曲の階梯を強いることと同じである。将来プロになるつもりなら、それは意味のある選択だ。しかし、別の道はないのだろうか。すでに習い覚えたものを活用しつつ、楽しみの果実を受け取るという道が。言うまでもなく、教育あるネイティブ・スピーカーのレベルの英語能力にまで到達することは困難で、かつ *time-consuming* な過程だ。機会費用を考えるなら、このために多くの資源を差し出さざるをえないだろう。

この「楽しみの果実」として、筆者はかつて、高原状態の英語力でのコミュニケーションを提案したことがある（遠藤 2001）。多少限られた英語能力であれ、参加者が助け合いつつそれを活用し、英語の非母語話者どうしで国際的コミュニケーションを楽しみ、大人として互いに成長するという方策である。ただし、コミュニケーションには「話すべき内容」が必要なのであり、今回はこの点の考察が不十分だったと思う。仕事の話や、身の回りの話、趣味嗜好・経験といった、いわゆる定番の話題のほかに、もっと大人にふさわしい話題はないのだろうか。

常識的な提案かもしれないが、筆者としてはここに「教養」を加えたい。それも、単なる知識の披露ではなく、多くの人がそこから話題を展開できるプラットフォーム的な教養が適している。そうしたプラットフォームとしてしばしば挙げられるのが歴史であるが、英語でのコミュニケーションに限るなら、教養としての英語史もそこに加えることができるのではないか。教養科目「英語の歴史」で受講生から寄せられた多様かつ充実したコメントを読む限り、歴史・民族・国際関係・社会・文化などに加え、芸術さえもこのプラットフォームに乗せて語る可能性があるを感じる。とりわけ、言語芸術である文学については、もっと見直されてよい。ただし、一つ課題がある。

文学は魅力的なコンテンツの一つだが、クラシック音楽と同様、アカデミックな研究・批評とアーティスト的な創作が主要な言説の場となってしまう、一般人が気軽に言及できるようなものではなくなっている。その魅力を否定するのではなければ、何らかの方法でそれを救出したほうがよい。ここで容易に実行できる方法の一つは、文学テキストを書かれた当時の文脈に置き直し、他の分野のテキストと並列的に、余計な講釈を交えずにさらりと読むことだ。そうすることで文学作品の評価付け（そしてそれを通じた評価者の教養程度の値踏み）という陥穽から逃れることができる。筆者は教養科目としての英語史を通じて、文学テ

キストを英語史のプラットフォーム上で読もうとする試みを続けてきた。『ガウエイン卿と緑の騎士』の一場面、『カンタベリー物語』の冒頭部分、シェイクスピアのソネットの一篇をこうして原語で読んだ経験を持つ学生は、文系理系を含め、本学で既に二千人を超える。そこから将来、何ごとかを語るができるとしたら、ささやかながら教養科目としての英語史の可能性が開花したとは言えないだろうか。

¹ 講読に使用したテキストは東浦（編）（1975）。これは Henry Sweet 著 *Anglo-Saxon Primer* (Norman Davies 校訂による第9版、1953年刊) に詳細な日本語注を加えたものである。

² 講読に使用したテキストは市河（編）（1926）のリプリント。総序(The Prologue)の部分には、左ページに原文が、右ページには当時の推定発音の IPA 表記が載っている。ここまで丁寧に整備された中英語のテキストは、英米で出版されたものでも見出し難い。

³ この講義を準備する際には、その前年に出版された寺澤(2008)に大いに助けられた。この本は英語史そのものに加え、社会的文脈にもバランス良く目配りしており、非常に優れた英語史の概説書であると思う。筆者の教養科目「英語の歴史」では例年、寺澤(2008)を参考書として受講生に薦めている。

⁴ 最後の方の授業時間では、受講生に約30冊の英語史の概説書・専門書等を紹介したリーディング・リストを配布し、さらに学びを深めたいという要望に応えている。過去においては、おそらくレポート作成準備もあり、このリストを含め、大学図書館が所蔵する英語史関係の図書がほぼ全て貸し出されたこともあった。

参考文献

Aitchison, Jean (1991). *Language change: progress or decay*. Second edition. Cambridge: Cambridge University Press.

遠藤 史 (2001)「英語教育の共生モデルに向けて」．『和歌山大学経済学部研究年報』5: 1-29.

東浦義雄（編）（1975）『H・スウィート古代英語文法入門』．東京：千城.

市河三喜（編）（1926）*The Canterbury Tales by Geoffrey Chaucer with introduction and notes*.（研究社英文学叢書）．東京：研究社.

Lass, Roger (1994). *Old English: A historical linguistic companion*. Cambridge: Cambridge University Press.

寺澤 盾 (2008)『英語の歴史 過去から未来への物語』（中公新書 1971）．東京：中央公論新社.